

教育現場における日常的な音楽利用の実態と必要性の検討

—音環境及び音楽科教育の観点から—

教育学研究科 芸術教育専攻 音楽科教育学領域 戸田南帆

私たちは日々様々な音楽を耳にする。これほど音楽に溢れた生活を送っていると、音に対して注意力のない子どもを育ててしまうのではないだろうか。私たちの身の周りにある音楽は、自ら能動的に聴く音楽と、他動的に聞こえてくる音楽に大きく分けられる。他動的に聞いてしまう音楽の代表例としてBGMが挙げられる。(Background Music : 背景音楽) BGMは飲食店や病院、スーパーマーケットなど、あらゆる場所で使用されている。学校も例外ではなく、登下校や昼食時、清掃中などにBGMが使用されていることは珍しくない。筆者はそれに疑問を抱いた。例えば量販店ではBGMを使用することによって顧客の購買意欲が上がるということが報告されているが、学校現場で使用されるBGMにはこのような使用意図や効果はあるのだろうか。また、毎日の生活の中に音楽が溢れていては、身の周りの「音」に対する意識が著しく低下してしまうように感じる。身の周りに音楽があることが当たり前になってしまい、音楽に対する興味関心が薄れてしまうのではないだろうか。このような観点から、学校でのBGMとしての音楽利用について考察したいと考えた。

小中学校新学習指導要領の音楽科の目標には、「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」の育成が掲げられている。この目標を達成するためにも、児童生徒を取り巻く音環境の整備は必要不可欠な要素であると筆者は考える。音環境及び音楽科教育の観点と、筆者が実施した教員および児童生徒を対象としたアンケート調査の結果から学校内のBGMの必要性について考え、子ども達の身の周りの音や音楽に対して興味関心をもつ態度を養うための取り組みとして、小中学校の音環境の整備について検証し直すことを本研究の目的とした。

音環境やBGMの定義を明確にした上で、現在の日本社会の音環境に至るまでの背景を把握する手立てとして、まず文献や資料を基に国内外の音楽利用の歴史や学校放送の歴史について整理した。次に、学校内のBGMとしての音楽利用の現状を把握するために現職教員を対象にアンケート調査を行い、多くの小中学校で音楽が利用されていることを確認した。同時に、学校内の音環境に対する児童生徒の意識調査を行った。これらの結果を分析し、児童生徒を取り巻く音環境が音や音楽への関心に及ぼす影響について考察する。また、身の周りの音や音楽に気付き、関心をもつための手助けとなるよう、日々の学校生活の中で取り組むことができる簡単な活動試案も提案した。

今後、学校内における音環境の重要性を広く社会に発信し、より良い学校環境づくりを目指したいと考える。